

子どもの発達を理解に基づく支援とは何か ——「子どもの理解と支援のための発達アセスメント」を刊行して

本郷 一夫

■「気になる」子どもの出現

本書の刊行に際して、はじめに、最近の子どもと子どもを取り巻く状況の変化について述べることにしよう。

私は、ここ二〇年くらい保育所の巡回相談に携わっている。保育所に向くと、当初は、「自閉症とはどのような障害でしょうか?」「ダウン症の子どもはどのように成長していくのでしょうか?」といった障害の特徴や障害をもつ子どもの一般的な発達経過について質問を受けることが多かった。研修会などを通して障害についての知識

が広まるにつれて、そのような質問は少なくなった。代わって、「障害をもつ子どもの保育をどのように工夫すれば良いでしょうか?」といった具体的な保育の進め方についての質問が増えた。

しかし、二〇〇〇年前後くらいから状況が変わってきた。障害児をもつ子どもよりもむしろ障害とは判定されていない子どもの保育についての質問が増えてきたのである。「知的な遅れはないと思うのですが、落ち着きがなく、他の子どもとのトラブルが多い子どもをどのように理解したらよいでし

ょうか?」「家庭にも特に問題はないように思うのですが、保育者の指示には従わないで集団から頻繁に飛び出す子どもをどのように保育していったらよいのでしょうか?」などの質問を受けるようになった。いわゆる「気になる」子どもの出現である。

このような「気になる」子どもは、知的には顕著な遅れがないにもかかわらず、①対人的トラブルが多い、②落ち着きがない、③順応性が低い、④ルール違反が多い、⑤衝動性が高いといった特徴をもつ。家庭では特に問題はないが、集団場面では対応が難しいケ

ースもある。また、集団場面でも、うまく振る舞える日と逸脱が目立つ日があるため、なかなか子どもを理解するのが難しい。

「気になる」子どもが目立ち始めた当初は、子どもの姿を直接見ていない人からは、「子どもにとってけんかはつきものだ」「子どもは昔から落ち着かないものだ」「子どもが変わったのではなく、子どもを見る大人の目が変わったのだ」といった意見も多く聞かれた。このような意見の中にも真実は含まれているだろう。しかし、長年、保育に携わってきた保育者が「子どもをうまく理解できない」「保育をどのように進めたらよいのかわからない」「子どもの姿を保護者にどのように伝えたらよいのか難しい」と感じる人が多い。単に子どもを見る大人の目が変わったということだけでは説明がつかない。

また、専門機関で診断をしてもらって支援計画を立てる上でも、これまでの育ちの経過を捉えておくことが重要となる。たとえば、三歳になったのに「ママ」「パパ」「ワンワン」「ミルク」などいくつかの一語文しか話さない子どもについて考えてみよう。標準的な発達年齢からすると確かにその子どもの言語発達は遅れていると言える。しかし、その遅れの原因はどこに求められるのか、その発達のメカニズムのどこに問題があるのかを知るためには、その子どもの発達経過を知る必要がある。すなわち、①一歳頃に初めて言葉が出たが、その後の発達が見られず三

てもよくわからないことがある。専門機関で子どもの状態を理解しようとする際には、まず、知能検査が行われることが多い。実際、何らかの「問題行動」が知能の遅れや偏りに起因していることがあるため、知能検査は子どもを理解するための有効な手段となりうる。しかし、「気になる」子どもたちに関しては、知能検査を試してみても「問題」の原因が発見できないことも多い。場合によっては、「平均よりも知能が高く、何の問題もありません。むしろ優秀な子どもさんですよ。」などと言われることもある。専門機関で「問題なし」と言われても、依然として、集団場面では、うまく適応できない状態が続く。最近では、ADHD（注意欠陥／多動性障害）、LD（学習障害）、高機能自閉症などの発達障害をもつ子どもについても知られるようになってきた。そして、「気になる」子どもはこれらの発達障害をもつ子ども

歳までその状態が続いているのか、②これまで言葉が一切出なかったのが三歳になって初めて言葉が出たのか、③一歳頃に一度言葉が出たが、その後言葉が出なくなり、三歳になって再び言葉が出はじめたのか、といったことがある。それによって、その子どもが抱えている問題の性質が違いため、当然、支援の方向も異なってくる。

もう一つの点は、「多様な側面から子どもを理解する」ということである。この多様な側面は、大きく「個性・特性」と「環境」に分けられる。このうち、「個性・特性」に

もと同じなのか違うのかの判断もますます難しくなっている。

■子どもを理解するための発達アセスメント

以上のような現状のなか、本書は、改めて、子どもを理解することとはどのようなことなのかを問い直すとともに、子どもの発達を理解するための手法とその理解に基づく支援の方法を示すことを目的として刊行された。

それでは、子どもの発達を理解するとはどのようなことなのであろうか。本書では、大きく二つの視点を強調している。一つは、「時間の流れの中で子どもを理解する」ということである。現在の子どもの抱えている「問題」を理解しようとする場合、現在の子ども状態を詳細に調べるのはもちろんのことである。しかし、現在の状態をいくら詳細に調べてもみても理解できない部分が残る。また、後に述べ

は、認知・知能などの領域に加えて、情動、気質・性格、運動などの領域が含まれる。先の「気になる」子どもの例に見られるように、いくら詳細に知能の特徴だけを調べても、子どもの理解にはつながらない場合がある。したがって、発達アセスメントに当たっては、個々の領域の発達を捉えると同時に、領域間の相互の関連（発達連関）について知ることが重要となる。そのような観点から、本書では、「知能・発達のアセスメント」だけでなく、「情動のアセスメント」「医学・生理学的側面のアセスメント」などを取り上

げている。

「多様な側面から子どもを理解する」という観点からのもう一つの重要なアプローチは、子どもを取り巻く「環境」を捉えることである。個人の現在の状態は、個人の能力や特徴だけではなく、その個人がどのような環境に置かれているのかによって違ってくる。すなわち、個人と環境の相互作用という観点から子どもの発達を理解する必要がある。そのような観点から、本書では、子どもが日常的に生活する保育所・幼稚園・学校などの「クラス集団のアセスメント」と同時に「家庭・保護者のアセスメント」の章を設定した。

■ アセスメントから支援へ

本書では、発達アセスメントを「人理解し、人の行動や発達を予測し、その発達を支援する方法を決定するためにに行われる測定・評価」と定義し

とそのメカニズムによって決められる。

さらに、個人を変化させるのではなく、環境を変化させることによって個人の社会適応を増すというのももう一つの重要な支援の方向性である。これに関連して、現在では、障害も個人に閉じた特徴ではなく、環境との相互作用によって決められるという考えに変わってきている。世界保健機関（WHO）の「国際生活機能分類——国際障害分類改訂版」（ICF）では、心身機能の障害が生活機能の障害を生み出すといった直線的な考えではなく、個

た。それでは、発達アセスメントに基づく支援とは、どのような支援なのだろうか。発達支援の目的は、単に「できないことをできるようにすること」「よりはやく正確にできるようにすること」ではない。むしろ、支援によって、「その人とその人を取り巻く人々の現在の生活がどのように豊かになるのか」「将来の生活や発達にどのような道が開かれるのか」といった視点こそが重要なのである。したがって、発達アセスメントによって発達の遅れ、偏りがわかったとしても、単純に、遅れを取り戻すこと、偏りをなくすことを目標にするわけではない。

支援計画の立案に当たっては、新たな「能力・スキルの獲得」を目的とする場合がある。しかし、その場合も「発達の筋道に沿った能力」を獲得させるのか、「通常の発達とは異なる能力」を獲得させるのか、分けることができる。前者は、知的な側面での発達

人を取り巻く環境という観点から障害を捉えている。たとえば、同じレベルの機能障害があっても、バリアフリーの整備が進んだ環境で生活しているか否かによって、その人の社会への参加の程度が違ってくるということである。

このように、子どもたちが抱える問題はさまざまである。一見すると同じような問題に見えても、その背景は必ずしも同じではない。したがって、支援に当たっては、子どもたち一人一人のニーズをしっかり把握し、状況に合わせて適切なアプローチを選択する必

がゆっくりしている子どもに対して、スモール・ステップを組んで、発達の筋道に沿いながら少しずつ能力を獲得させていくといった場合が当たる。

一方、後者の例としては、『我、自閉症に生まれて』の著者テンプル・グランディンの対処方略をあげることができる。彼女は、直感的に他者の意図や気持ちを理解することがなかなか難しいということを語っている。そこで、まるで「火星に降り立った人類学者」のように、周りの人々の会話や自分の経験したコミュニケーションから得た資料から膨大なライブラリーを作り、過去の対人的エピソードの記憶の中から同じような状況でうまくいった行動を選択することによって、社会生活を営んでいるのだという。これは、「通常の発達とは異なる能力」を獲得して、適応している例だと考えられる。どちらの方向の支援を目指すのかは、個人が抱えている「問題」の背景

要があると考えられる。そのような支援によって、子どもたちの豊かな発達が創り出されるようになればと思う。

（ほんごう・かずお）

東北大学大学院教育学研究科教授

本郷一夫「編」『子どもの理解と支援のための発達アセスメント』
有斐閣選書 ●好評発売中
四六判、二四二頁、定価一八九〇円（税込）